士冠疏』東文研叢刊　1984年，『中国の思惟』1985年，編『儀禮士昏疏』東文研叢刊　1986年，編『中国道教の現状 ── 道士・道協・道観』本文冊・図版冊　東文研叢刊　1990年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「迷と悟」岩波講座東洋思想13『中国宗教思想1』1990年4月，「六朝時代の知識人」『中国 ── 社会と文化』5　1990年6月，「三論教学形成における自然と因果 ── 僧肇から吉蔵まで」平井俊栄監修『三論教学の研究』春秋社　1990年10月，「黄河・長江が創出した中国文明」季刊『河川レビュー』№77　1991年9月，「劉長生の生涯と教説」『東文研紀要』117　1992年3月，『金代道教の研究 ── 王重陽と馬丹陽』東文研報告　1992年3月。

丘山　新　おかやま　はじめ

1．主要略歴

1948．6生，1972　京大・理・物理学卒，1976　東大大学院人文・印哲・修士課程修了，1979　同博士課程退学，同年　財団法人東方研究会専任研究員，1980　中国・北京大学留学（1982まで），1986　日大文理学部専任講師，1990　東文研助教授。

2．研究活動の概要・研究経過

私は，従来，漢訳仏典を資料として東アジア地域における宗教思想の研究を進めてきた。そしてその研究は，次の二方面からなる。（一）漢訳仏典の語彙的研究：インドから齎された仏教経典を中国語に翻訳する際に，訳者は一般の文章語には用いられない口語表現（語彙・語法）を多く採用したり，新しい語彙を創りだした。これらの語彙や語法の体系的な整理・

研究は，漢訳仏典をより精確に読解するためにも，またさらには中国中古（六朝・隋唐）時代の語法研究のためにも，不可欠の基礎作業である。また，サンスクリット原典との比較研究により，中国語に翻訳される段階で既に仏典は中国的に変容されていることを解明してきた。この方面での成果は，『長阿含経』の一連の翻訳・注釈（単行本全4冊として平河出版社から刊行予定）や「漢訳仏典の文体論と翻訳論」等の論文でその一部を示した。また，漢訳仏典と日本文化の関わりについても「漢訳仏典論」で指摘した。（二）漢訳仏典の受容に関する研究：漢訳仏典は，そのインドにおける主題と関わりなく，中国人の各時代の問題意識に基づいて受容されていった。従って，それぞれの経典がどの様に受容されたかを探ることにより，中国における各時代の時代思潮の一端を解明しうるであろう。この様な観点により，中国仏教史を中国の文化史の一部として新たに再構築すべく研究を進めてきた。「東晋期仏教における言語と真理」や「『大阿彌陀経』の思想史的意義」は，この方面での成果の一部である。以上の二方面からの漢訳仏典の研究は今後も継続され，体系化されてゆくであろう。

また，最近は仏教信仰の根本的構造を解明し，アジアの宗教，特に仏教に基づく新たなる宗教哲学の理論構築をも目指しており，その最初の成果は『開かれゆく自己』（春秋社刊行予定）として明らかにされる。このいわば宗教に関わる普遍的課題の解明は孤立した課題ではなく，この作業を通して，逆に東アジアの各文化圏のそれぞれの文化的特質も明らかにされるはずである。さらに，現在，任継愈主編『中国仏教史』全8巻を監修・共訳中で，平成4年に第1巻を刊行予定（柏書房）であり，現在の中国における仏教研究の最新の成果を紹介することになる。なお，1992年度はドイツ・ミュンヘン大学からの招聘により，客員研究員として一年間中央アジア出土漢訳仏典の研究に従事する予定である。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学人文科学研究科中国哲学・印度哲学専攻　漢訳仏典の研究　1990，

91年度，東京大学教養学部全学一般教育ゼミナール　漢訳仏典の受容 1990(冬)年度，日本大学文理学部　宗教学　1990，91年度，名古屋大学文学部　中国哲学史概説　1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

なし

5．学外活動（1990．4～92．3）

東大中国学会（評議員），日本印度学仏教学会，東方学会，日仏東洋学会，東西宗教交流学会。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「漢訳仏典に及ぼした中国思想の影響」『仏教思想史』2　1980年，「漢訳仏典の文体論と翻訳論」『東洋学術研究』22—2　1983年，「東晋期仏教における言語と真理」『東洋文化』66　1986年，「漢訳仏典論」『東アジアの仏教』1988年，「『大阿弥陀経』の思想史的意義」『東洋文化』70　1990年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「〈閉じられた自己〉から〈開かれゆく自己〉へ」『東文研紀要』117 1992年3月，『中国仏教史（任継愈主編）』一　監修・共訳　柏書房（1992年6月刊行予定）。

田仲　一成　たなか　いっせい

1．主要略歴

1932.11生，1955　東大・法卒，同年　日本相互銀行入社，1957　同退社，同年　東大大学院人文・中文・修士課程入学，1959　同修士課程修了，同

年　同博士課程入学，同年　都立深川高校教諭，1962　同博士課程満期退学，1963　都立新宿高校教諭，1965　同退職，1966　北大文学部助手，1968　熊大法文学部専任講師，1969　同助教授，1972　東文研助教授，1974　文献センター助教授併任（1976 まで），1981　東文研教授，1983 文学博士（東大），1987　文献センター主任（教授）併任（1988 まで）。

2．研究活動の概要・研究経過

この十五年間，華中，華南地域の農村祭祀演劇の現地実態調査に専念してきた。香港，シンガポール，マレーシア，タイなど，東南アジアの華僑社会に残存している祭祀演劇の調査に約十年を費やし，研究の視点と基礎資料を獲得するようにつとめた結果，大筋の歴史的な見通しを得た。近五年はこの成果をふまえ，中国大陸の農村祭祀演劇の調査に集中している。中国側でも近年，民族学，宗教学の影響が強く，新資料の発掘紹介も進んできているので，交流し易い条件にある。引きつづき，仮面劇，目連戯はじめ宗教劇の研究を進めて行く方針である。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院人文科学研究科中国語中国文学専攻　西廂記研究　1990，91年度，九州大学文学部東洋史学科　中国史特殊講義（明清郷村史）1990年度，北海道大学文学部中国文学科　中国戯曲史　1990年度，埼玉大学教養学部　中国演劇論　1991年度，弘前大学人文学部　中国の演劇と社会　1991年度，早稲田大学大学院文学研究科　中国演劇史　1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

図書行政商議会委員。

5．学外活動（1990．4～92．3）

なし

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の変質について」『東文研紀要』60・63・65・71・72・102　1973～87年，『中国祭祀演劇研究』東文研報告 1981年，『中国の宗族と演劇』東文研報告　1985年，『中国郷村祭祀研究』東文研報告　1989年，"The *Jiao* Festival in Hong Kong and N.T.," *Religion in China Today,* Edited by Julian Pas, Hong Kong Branch of Royal Asiatic Society, 1989.

7．過去 2 年間（1990．4 ～ 92．3）の研究業績

「中国初期演劇史試論 ── 仮面劇よりの展望」『東洋文化』71　1990年12月，「シンガポール潮僑の組織と演劇」『創大アジア研究』12　1991年 3 月，「華南同族村落における祭祀儀礼の展開 ── 儒礼から演劇へ」『中国研究集刊』10　1991年 6 月，「超度・目連戯以及祭祀戯劇的発生」（中文）『戯曲研究』（北京）37　1991年 6 月，「車王府曲本について」『學鐙』88―6 1991年 6 月，「貴州儺堂戯と紅頭巫術 ── 中国の仮面劇とその宗教的背景」『月刊しにか』2―8　1991年 8 月，「再び車王府曲本について」『学鐙』88―9　1991年 9 月，「シンガポール瓊僑の功徳法事における"破獄"儀礼について ── 貴州紅頭巫術，儺堂戯との類似性を中心として」『学習院大学調査研究報告』40　1992年 3 月，「閩北の普度と目連戯 ── 中国初期演劇史初探」『東文研紀要』117　1992年 3 月，「論中国戯劇従宗教祭祀中産生的過程和環境 ── 与欧州　日本戯劇比較」（中文）国際学術研究報告書『東晋農村祭祀戯劇比較研究』1992年 3 月，「書評：中鉢雅晃『中国の祭祀と文学』（創文社）」週刊『読書人』1990年 4 月，「翻訳：劉春江「江西青陽腔目連戯と宗教儀式活動」」『東洋文化』71　1990年12月。

丸尾　常喜　まるお　つねき

1．主要略歴

1937. 3生，1962　東大・文・中文卒，同年　大阪市大大学院文学・修士課程入学，同年　私立啓光学園教諭，1964　同退職，大阪市大大学院修士課程退学，同年　熊本県立人吉高校教諭，1968　北大文学部助手，1973　同助教授，1990　東文研教授，1992　博士（文学・東大）。

2．研究活動の概要・研究経過

研究分野は中国古典小説研究と中国現代文学研究の二つに分けられる。

前者は，個別的なテーマにたいして深く掘り下げるよりも，むしろ通観的な歴史研究を中心とする。この分野の成果として，訳注書『中国小説の歴史的変遷』（凱風社，1987），「分裂と団円——『離魂記』を読む」（『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』，汲古書院，1991）などがある。また宋代に上演された記録をのこし，各地に伝承されてきた『目連戯』にも関心を抱き，1990年に田仲一成教授を代表とする海外学術調査「中国郷村祭祀演劇調査団」に一部参加し，10日間にわたって浙江省各地の目連戯調査を行った。

後者は，特に1975年以後は魯迅の文学について研究をすすめ，ほぼ系統的に論文を発表してきている。その出発点となったのが「狂人日記」第十二節末尾一句の読解に関するノート「『難見真的人！』考」（『熱風』4，1975）で，この一句に魯迅自身の「民族的羞恥」の意識を見る見解である。その後の「民族的自己批評としての魯迅文学」という副題を持つ「出発における『恥辱』（羞恥）の契機について」（『北大文学部紀要』25—2，1977）以下の一連の論考は，魯迅における「羞恥」がその後どのような運動によってどのような軌跡を描いたかを追求したものであり，のちに評伝『魯迅』（集英社，1985）の軸となった。

1983年の「阿Q人名考」(『文学』51—2) は,「阿Q正伝」の主人公阿Queiの名は「鬼」の諧音であり,作品は中国民族の国民性の重大欠点として認識された奴隷精神の遺伝性に着目して,それを「鬼」ととらえ,同時にそれに民俗的な「鬼」の諸相を重ねたものであることを,重ねられている宗教的な「鬼」の観念や説話,小説,目連戯などの旧劇に見出される「鬼」の表象の具体的な指摘によって証明しようとした。この一編は,中国宗教史,思想史,社会史上重大な意味を持つ「鬼」の有無をめぐって展開された「祝福」,科挙の敗残者の姿を通して中国文化の重大な困難を剔抉した「孔乙己」を論じた論考などとともに,大幅な増訂を加えて学位論文『魯迅と伝統に関する基礎的考察』(1992年学位授与,未刊) にまとめられている。

3. 教育活動 (1990. 4～92. 3)

東京大学大学院人文科学研究科中国語中国文学専攻　近現代文学と伝統社会　1990, 91年度,東京大学教養学部教養学科　アジアの歴史と文化 1990(冬)年度,北海道大学文学部　中国文学特殊講義　1990年度,東京大学教養学部全学一般教育ゼミナール　魯迅《門外文談》を読む　1991(冬)年度,日本大学文理学部　中国語学演習・中国文学演習　1991年度,北海道教育大学旭川分校　漢文学特講　1991(冬)年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4～92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4～92. 3)

東方学会,日本中国学会,東大中国学会 (理事)。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

共編『魯迅文言語彙索引』東洋学文献センター叢刊　1978年,「阿Q人名

考――『鬼』の影像」『文学』51―2　1983年，訳『彷徨』（『魯迅全集』）1984年，『魯迅――花のため腐草となる』1985年，「祝福と救済――魯迅における『鬼』」『文学』55―8　1987年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「分裂と団円――『離魂記』を読む」『竹田晃先生退官記念東アジア文化論議』汲古書院　1991年6月，「精読：魯迅『祝福』」『中国語』1991年8月～11月，「頽れいく進化論――魯迅「死火」と「頽れおちる線の顫え」」『東文研紀要』117　1992年3月，「翻訳：魯迅「薬」「阿Q正伝」」中野美代子他編『中国怪談集』河出文庫　1992年3月，『魯迅と伝統に関する基礎的考察』博士論文　1992年3月東京大学学位授与（未公刊）。

山之内　正彦　やまのうち　まさひこ

1．主要略歴

1933.10生，1961　東大・文・東洋史卒，1963　東大大学院人文・中文・修士課程修了，1964　同博士課程退学，同年　東文研助手，1983　文献センター助手，1989　東文研助手。

2．研究活動の概要・研究経過

1）晩唐より北宋末に至る詩歌（詩と詞）における豔情（性愛）の変容。定点として李商隠・温庭筠及び『花間集』・歐陽脩・晏幾道・柳永・周邦彦を択び，現在周邦彦の詞を精読中。

2）唐・宋詩における〈梅花〉のイメージの変容。用例（六朝詩・唐詩については詩句，宋詩については題詠詩）の採集（カード約1500枚）を終り，検討中。所外の学徒とともに「唐詩研究会」に参加，その共同研究「唐詩の植物」の一項である。

3) 『滄浪詩話』以後のもっとも体系的な詩論書である清初の葉燮の『原詩』訳注。原書のほぼ半ばまで粗訳進行中。

以上いずれも発表には至っていない。

3．教育活動（1990．4～92．3）

な　し

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

な　し

5．学外活動（1990．4～92．3）

な　し

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「李商隠表現考・断章――艶詩を中心として」『東文研紀要』48　1969年，「落日と夕陽――唐詩における夕日の詩語初探」『東文研紀要』63　1974年，「孟郊詩論――連作詩を中心に（上）」『東文研紀要』68　1976年，「桂――唐詩におけるその〈意味〉」（正編及び補遺）『東文研紀要』88・92　1982―83年，共著『中国文学歳時記・春下，秋上』1988～89年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

な　し

戸田　禎佑　とだ　ていすけ

1．主要略歴

1934．9 生，1957　東文・文・美術史卒，同年　日本テレビ入社，同年　退

社，1959　東大大学院人文・美術史・修士課程入学，1962　同修了，同年同博士課程退学，同年　東京国立文化財研究所入所（文部技官），1971　東文研専任講師，1972　同助教授，1980　文献センター助教授併任（1982まで），同年　京大人文研助教授併任（1982まで），1982　東文研教授，1988　文献センター主任（教授）併任（1991まで）。

2．研究活動の概要・研究経過

中国絵画史，就中，南宋，元時代の作品に焦点をあてて研究を進めている。『東洋文化研究所紀要』117号の「牧谿における宋と元」，『国華』1016号の「南宋院作画における金の使用例」，『大和文華』86号に発表した「南宋のイリュージョニズム」あるいは『国華』1152号の「毛倫筆・牧牛図」等は，いずれも南宋絵画の水墨的技法に支えられたグラデーションによる微妙な光の表現のあり方を追求したもので，このような強固な自然主義的表現の延長上に，元以降の，あるいは朝鮮半島，日本の絵画をおくことにより，その展開の具体相はより明確になると考えている。このような立場から，日本絵画史に対しても多くの提言を行って来て，それは「美術史における日中関係」（『美術史論叢』7）として発表した。すなわち，日本と中国の美術史は個々に論ずるよりも一つの有機的な共同体としてみる方が研究の成果が上るという基本的考え方を具体例をあげて指摘したわけである。そのことにより，日中双方の遺品の欠落，文献資料の欠落を補いあえる筈であるからである。

上記の如き個人的な研究活動の他，美術史は作品の実地調査研究が不可欠であり，1990年度にはヨーロッパ各地の中国絵画コレクションの調査撮影旅行を行い，多くの写真資料を蒐集し，1991年度には，これをアメリカ・カナダに行った。現在，東アジア美術の中国写真アーカィヴは，世界で最も充実しているものの一つになっている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻　東洋美術史演習　1990，91年度，東京大学文学部　中国絵画史　1990，91年度，早稲田大学大学院文学研究科　中国絵画史　1990，91年度，東北大学文学部　中国絵画史　1990年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

なし

5．学外活動（1990．4～92．3）

美術史学会（常任委員会委員），文化財保護委員会専門審議委員，『国華』編集委員。

6．過去の主要業績（1990．3まで）

『牧谿・玉澗』1973年，共編『海外・日本所在中国絵画目録』全5冊　東洋学文献センター叢刊　1977～83年，『静嘉堂中国絵画』1986年，「南宋院体画における『金』の使用について」『国華』1016　1988年，「南宋のイリュージョニズム」『大和文華』86　1991年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「李蔭庭筆　墨葡萄図」『国華』1143　1991年2月，「王良臣筆　墨葡萄図」『国華』1143　1991年2月，「ボストン美術館」N.H.K. B.S.放送　1991年5月，座談会「日本近代美術の諸問題」『国華』1150　1991年9月，「横山大観筆　蒲湘八景」『国華』1150　1991年9月，「美術史における日中関係」『美術史論叢』7　1991，「南宋のイリュージョニズム」『大和文華』86　1991.9，「毛倫筆牧牛図」『国華』1152　1991年11月，「牧谿における宋と元」『東文研紀要』117　1992年3月，「夏芷筆山水図」『国華』1155　1992年2月。

小川　裕充　おがわ　ひろみつ

1．主要略歴

1948.10生，1973　東大・教養・教養卒，1977　東大大学院人文・美術史・修士課程修了，1979　同博士課程退学，同年　東文研助手，1982　東北大文学部助教授，1987　東文研助教授，1990　ハイデルベルク大学客員教授。

2．研究活動の概要・研究経過

中国絵画を中心とする古代から中世の東アジア絵画史を主たる研究対象としている。具体的には，より構成主義的な華北山水画とより非構成主義的な江南山水画という二大潮流の対立と総合の観点から中国山水画を把握してゆくことが第一点。古代から中世の東アジア世界に通有の思想であった陰陽五行説に基づく，中国及び我国における障壁画の構成原理が，個々の造形作品にどのように実現されているのかを解明してゆくことが第二点。同じく古代から中世の花鳥画の中心的な素材であり続けた丹頂の六つに限定される型の，初唐から我国近世初頭にまで及ぶ展開を跡づけることが第三点である。この第一点と第二点は，山水画が，第二点と第三点も，花鳥画が，彼我いずれの国においても障壁画の重要な分野となっていたという意味で，繋がってくる。早く鑑賞絵画が独立した中国絵画史固有の展開の中で，その造形活動を捉えるのみならず，明確な用途をもった絵画制作の範疇においても，中国を中心とする東アジア絵画史に視野をおきつつ，その再把握を行ってゆきたいと考えている。

世界各地の公私のコレクションに所蔵される中国絵画の総体的な把握を基礎とし得るという意味で，上記の個人的な研究活動の支えとなっているのが，東アジア美術研究室の継続的な任務として，この三十年以上にわたって一貫して集積されてきた，中国絵画写真資料であり，無慮十万点に

及ぶ世界的な規模の資料数を誇る写真アーカィヴを維持・拡大してゆくことも研究活動の本質的な部分をなす。また，この写真資料を基礎として，中国本土と台北故宮博物院を除く，日本・東アジア・アメリカ・カナダ・ヨーロッパの公私のコレクションに所蔵される中国絵画の総カタログである『中国絵画総合図録』の改訂増補版を刊行することも，中国大陸や台北故宮博物院のそれを収載した『中国古代書画図目』や『故宮書画図録』と相補いあう点で，やはり不可欠の研究活動となっており，その準備のため，文部省科学研究費や三菱財団・トヨタ財団・鹿島美術財団の助成を得て，90年にヨーロッパ，91年にアメリカ・カナダ調査撮影旅行を実施し，本年度は，香港・台湾・韓国に赴くとともに，我国国内の抜本的再調査も開始の予定にしている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻　中国画史講読　1990，91年度，東洋美術史演習　1990，91年度，東北大学文学部・同大学院文学研究科　中国絵画史　1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

総合研究資料館運営委員会（1991年4月～1992年3月）。

5．学外活動（1990．4～92．3）

美術史学会，東方学会，古文化財科学研究会，密教図像学会。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「唐宋山水画におけるイマジネーション（上)(中)(下)」『国華』1034・1035・1036　1980年，「院中の名画 ── 董羽・巨然・燕粛から郭熙まで」『鈴木敬先生還暦記念　中国絵画史論集』1981年，共著『中国の花鳥画と日本』1983年，「牧谿 ── 古典主義の変容（上)」『美術史論叢』4　1988年，

「大仙院方丈襖絵考（上）（中）（下）」『国華』1120・1121・1122　1989年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

『海外所在中国絵画目録　増補改訂版（ヨーロッパ編）』（共編著）東洋学文献センター叢刊別輯17　1992年3月，「明画続録小考――相国寺蔵　文正筆　鳴鶴図（対幅）と関連して」『美術史論叢』7　1991年3月，「李公年筆山水図」（共著）『美術史学』13　1991年6月，「日本における東洋学の動向とその展望　1973～1985　美術史（アジア編）」『秋山光和博士古稀記念美術史論文集』便利堂　1991年7月，"The Relationship between Landscape Representations and Self-Inscriptions in the Works of Mi Yu-jen," *Words and Images: Chinese Poetry, Calligraphy and Painting,* The Metropolitan Museum of Art and Princeton University Press, 1991年8月，「薛稷六鶴図屏風考――正倉院南倉宝物漆櫃に描かれた草木鶴図について」『東文研紀要』117　1992年3月，"Sinoiserie around Japonaserie: A Study of Japonaserie: Oiran (after Keisai Eisen) by Vincent van Gogh"『美術史論叢』8　1992年3月，「李唐筆万壑松風図・高桐院山水図――その素材構成の共通性について」『美術史論叢』8　1992年3月。

林　秀薇　りん　しゅううぇい

1．主要略歴

1961．1生，1984　国立台湾大・文学部卒，1985　東大大学院人文・外国人研究生，1987　東大大学院人文・美術史・修士課程入学，1989　同修了，1990　同博士課程退学，同年　東文研助手。

2．研究活動の概要・研究経過

私は，中国宋元時代の人物画，とりわけ南宋道釈人物画の中心的な画家である梁楷の研究に従事している。梁楷の作品は，早く十四世紀から日本に渡来し，現在でも遺品が日本に多く珍蔵され，更に日本の中世の絵画に影響を与えたので，日中両国の美術の交流において極めて重要な画家と言ってよい。

この研究は，日本に伝わっている梁楷の作品への実物の精査を中心に進めているが，米国，台湾を含む中国の梁楷作品をも平等に扱い，よりグローバルな立場から南宋道釈人物画について日本側の見解に新しい視点を加えようとしている。「梁楷研究 ──［黄庭経図巻］について」（東大大学院修士論文・1989年）と「梁楷研究序説 ──「李白吟行図」から『図絵宝鑑』の梁楷伝記まで」（『東文研紀要』117冊　1992年3月）はこの研究方針に基いた論文である。

その一方，梁楷の影響を受けた日本の所謂漢画系人物画の現存作例を参考にして，中国で失われた種々の南宋道釈人物画を復元的に考察するという日本的な視点を積極的に生かそうともしている。これに基いて現在，「海北友松の袋人物から梁楷の減筆体へ」（1992年5月東方学会発表）の論文を執筆中である。

なお，東洋文化研究所東アジア部門美術研究室は，日本及び世界各地のコレクションの中国絵画に関する写真アーカィヴの充実をはかり，第二回の中国絵画調査撮影を行うことにした。研究室の一員としてこの調査活動に参加し，1990年のヨーロッパと1991年のアメリカ地域の調査に続いて，今年度は東南アジアの海外調査を計画中である。その成果を最終的に『中国絵画総合図録』の改訂増補版として公開する予定で，梁楷研究の傍ら中国絵画史研究のための工具書の資料蒐集にも務めている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

なし

4．学内行政事務分担（1990．4～92.3）

なし

5．学外活動（1990．4～92．3）

美術史学会。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「梁楷研究――〔黄庭經図巻〕について」（東大大学院修士論文）1989。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「梁楷研究序説――「李白吟行図」から『図絵宝鑑』の梁楷伝記まで」『東文研紀要』117　1992年3月。

南アジア部門

加納　啓良　かのう　ひろよし

1．主要略歴

1948. 3 生，1970　東大・経卒，1971　アジア経済研究所入所（調査研究部），1976　インドネシア派遣（1978まで），1980　東文研助教授，1986　オランダ等出張（1987まで），1987　インドネシア等出張（1988まで），1990　経済学博士（東大），1991　東文研教授。

2．研究活動の概要・研究経過

中・東部ジャワの農村地域を主な対象に，インドネシア経済の歴史と現状を，東南アジアの他の国々，地域や日本の場合との比較を念頭に置きながら研究を進めてきた。1971年に研究を始めてから最初10年間ほどは，特定村落における現地調査の成果を踏まえてジャワ農村の社会経済構造の現状を，それらの事例に拠りながらできるかぎり精密に記述するモノグラフの作成に研究の重点を置いた。「6．過去の主要業績」の欄に掲げた『パグララン』，『サワハン』の二点は，この時期の研究活動の主要成果であった。1980年に東文研に赴任してからは，諸種の統計や官庁資料，他の調査報告類をも活用して，一村レベルを越えた，地域全体の面的広がりをもつ鳥瞰的研究にも関心を向け，いくつかの論文を発表した。同上欄に掲げた『インドネシア農村経済論』は，これらの研究成果を一冊の著作にまとめたものである。他方1978年にはフィリピンでの，また1984年にはタイでの文部省科学研究費による共同調査に参加して，国際比較の視野を広げる機会を得た。

以上の現状分析の仕事と並行して，先々19世紀以降の歴史的変化の過程の分析を主な研究対象に据えるための準備作業をも進めた。1976年に最初

の現地調査に赴く前に1870年代のオランダ語資料を用いて試みたジャワの土地制度についての研究や，1981年以降発表してきたジャワの糖業史とそのアジア域内交易での位置などについてのいくつかの論文は，これらの準備作業の成果である。また，やはり「過去の主要業績」の欄に掲げた『内務省雑誌所収論文・記事目録』などの書誌も，歴史的研究に本格的に取り組むための予備作業の産物である。

これらの研究活動を進めたのち，1986年から1988年までの合計2年間弱，国際文化会館社会科学フェローシップにより，オランダとインドネシアに研究留学の機会に恵まれた。オランダでは，国立公文書館といくつかの研究所図書室で念願の植民地時代のインドネシア経済史に関する史資料調査を，またインドネシアではかつて調査した村落での追跡調査と若干の地域での農村史についての現地調査を行った。1990年以降現在まで，この在外研究の成果を一連の論文にまとめる作業を続けている。「過去の主要研究業績」の欄に示した「ジャワ村落史の検証」，「7．過去2年間の研究業績」の欄に掲げた「『地代』制度導入期ジャワ農村の『耕作者』像」などが，これまでに発表した主な論文である。また上記在外研究期間には，旧著『パグララン』のインドネシア語版を新たに執筆し，1990年に現地で出版された。

以上は個人研究の概況であるが，1990年からは，科学研究費および三菱財団助成金により，オランダのアムステルダム・アジア研究センター（CASA）およびインドネシアのガジャマダ大学と提携して，中部ジャワ北海岸のチョマル地方での過去約100年間の農村社会経済および政治構造の変化に関する国際共同研究をも進めている。1992年にはその総括シンポジウムをインドネシア現地で催し，その後に成果を英文の共著にまとめる仕事に着手する予定である。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学教養学部教養学科　東南アジア地域文化研究　1990(夏)年度，東

南アジア近代史　1991(冬)年度，東京大学大学院経済学研究科　経済史演習（アジア経済史）1990年度，経済史専攻指導　1990，91年度，東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻　社会人類学特殊研究Ⅰ　1990年度，社会人類学特殊研究Ⅱ　1991年度，千葉大学法経学部　経済開発論　1990年度，千葉大学教養部　東南アジア地域研究　1990年，91年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

東京大学大学院経済学研究科委員会　1990年4月～1992年3月。

5．学外活動（1990．4～92．3）

アジア政経学会（1991年12月から理事），東南アジア史学会，比較家族史学会，国際開発学会，東アジア経済学会，インドネシアに関するNGO国際フォーラム（INGI）第8回大会準備委員長。

6．過去の主要業績（1990．3まで）

『パグララン――東部ジャワ農村の富と貧困』アジア経済研究所　1979年，『サワハン――「開発」体制下の中部ジャワ農村』アジア経済研究所　1981年，編『内務省雑誌（*Tijdshrift voor het Binnenlandsch bestuur*）所収論文・記事目録』東洋学文献センター叢刊　1985年，『インドネシア農村経済論』勁草書房　1988年，「ジャワ村落史の検証――ウンガランの郡のフィールドから」『東文研紀要』111　1990年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

Pagelaran: Anatomi Sosial Ekonomi Pelapisan Masyarakat Tani di Sebuah Desa Jawa Timur, Yogyakarta: Gadjah Mada University Press 1990，「共同体の思想――ジャワ村落論の系譜」土屋健治編『東南アジアの思想』講座東南アジア学第6巻　弘文堂　1990年，「東部ジャワ農村の土地と労働――パグララン村再調査から」梅原弘光編『東南アジアの土地

制度と農業変化』アジア経済研究所　1991年，「アジア域内交易と東南アジア植民地支配」濱下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化1500～1900』リブロポート　1991年，「インドネシア経済の現状と展望——ASEAN 近隣諸国との対比において」国民経済研究協会『景気観測』1991年5月，「『地代』制度導入期ジャワ農村の『耕作者』像——マラン県『詳細査定簿』の分析」『東文研紀要』118　1992年。

柳澤　悠　やなぎさわ　はるか

1．主要略歴

1944.11生，1967　東大・経卒，1970　東大大学院経済・応用経済学・修士課程修了，1972　同博士課程退学，同年　横浜市大文理部学部専任講師，1976　同助教授，1983　東文研助教授，1989　同教授。

2．研究活動の概要・研究経過

南インドを主たる対象として，近現代インド経済史を研究してきた。研究は，農業・農村構造の変化に関するものと，都市・農村の在来手工業に関するものを中心として，1930年代の日印会商についても若干の検討を行った。

(1)農業・農村構造の変化については，1．イギリスにあるインド省図書館やマドラスの州政府公文書館所収の19世紀～20世紀前半の時期に出された政府公文書の収集と分析，2．州政府公文書館所蔵の地税査定のための村落土地台帳（約60村分）の電算機への入力（水島司氏と共同で作業）と分析，3．南インドの代表的河川流域たるティルチラパッリ県の村落の現地調査（1979～82年）を通じて，19世紀後半以降1980年代までの変化を解明しようとしてきた。

この中で特に注目してきたことは，村落の下層社会を構成する「不可触民」などの階層が19世紀後半以降次第に自立性を強めてくる過程である。

植民地支配期のインド経済史に関しては，イギリス植民地支配による農村社会の分解・土地無し貧困層の創出を主張するナショナリスト的な通説と，それを批判する実証的研究との二つの立場があったが，農村下層民の自立化と彼らの小作人への上昇・零細土地所有者化の過程を把握することによって，従前の対立する二つの見解を統一的に把握できると考えている。1991年刊行の『南インド社会経済史研究』は，以上の研究をまとめたものである。

(2)インド在来手工業については，1989年に文部省科学研究費による海外調査を組織し，南インド中小都市の手織業について現地調査と公文書館史料収集を行った。インド手織業が植民地支配で単純には衰退せず，織機数の増大すらあったことや，商人などの問屋制支配が展開したことはすでに明らかにされてきた。本研究では，農村下層民の自立化の進展と彼（女）らの衣服に関する社会的規制の弱化の結果，下層社会からの人絹織物や絹織物への需要が形成され，それが手織業残存・発展の一要因であろうという仮説を提出した。また，1991年には，文部省科学研究費調査隊の一員として，東インドのグジャラート州の村落手工業調査を行った。これについては，1992年11月にインド側研究者を含む研究会にて発表する予定である。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院経済学研究科応用経済学専攻　アジア経済論　1990，1991年度，東京大学経済学部　インド経済史　1991年度，東京大学教養学部　南アジア近代史　1991年度，新潟大学経済学部　アジア経済史　1990年度，横浜国立大学教育学部　アジアの経済と社会　1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

高速計算機委員会委員（1991年4月～），情報ネットワークシステムUTNET建設推進委員会委員（1991年4月～），経済学研究科委員（1990

年10月～)。

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本南アジア学会（常務理事），土地制度史学会，社会経済史学会，歴史学研究会，アジア政経学会，国際経済学会。

6．過去の主要業績（1990．3まで）

「南インドにおける地主・小作関係の展開」『インド史における村落共同体の研究』1976年，『南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的変容』1982年，*Socio—Economic Changes in a Village in the Paddy Cultivating Area in South India* 1985，共著『20世紀初の南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動——ティルチラパツリ県22ケ村の村落地税台帳分析』1988年，"Mixed Trends in Landholding in Lalgudi Taluk: 1895-1925", *Indian Economic and Social History Review,* Vol.26 No.4 1989.

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

『南インド社会経済史研究——下層民の自立化と農村社会の変容』東文研報告　1991年3月，「1865年南インド土地査定台帳：村落集計表」（水島司氏と共著）内藤雅雄編『近現代南アジアにおける社会変動と社会集団』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　1991年3月，「植民地支配南インドの手織業とその消費構造」『東文研紀要』118　1992年3月，"The Handloom Industry and Its Market Structure: The Case of the Madras Presidency in the First Half of the Twentieth Century", *Indian Economic and Social History Review,* Vol. 30 No.1（印刷中），「植民地期南アジアの社会経済史研究」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』1992年，「近藤正臣著『開発と自立の経済学』」『社会経済史学』57—4　1991年，「都市と農村：南インド」『事典イスラームの都市性』亜紀書房　1992年，「地主制」『南アジアを知る事典』平凡社　1992年（印刷

中)。

上村　勝彦　かみむら　かつひこ

1．主要略歴

1944．3生，1967　東大・文・仏文卒，1970　東大大学院人文・印哲・修士課程修了，1971　同博士課程退学，同年　東大文学部助手，同年　インド国・マドラス大留学，1973　帰国，同年　東大文学部助手退職，同年　財団法人東方研究会専任研究員，1978　国学院大文学部専任講師，1980　同助教授，1986　東文研助教授，1988　文学博士（東大），1989　同教授。

2．研究活動の概要・研究経過

最近の研究活動は主として三つの領域に分類され得る。一つは，修士論文以来続行して来たサンスクリット詩論に関する研究である。南インドのマドラスに滞在中に着手したラサ（美的陶酔）の理論の研究は，博士論文『インド古典演劇論における美的経験』として結実し，1990年に東洋文化研究所（東京大学出版会）から出版された。目下，アーナンダヴァルダナの詩論書『ドゥヴァニ・アーローカ』の翻訳を続行している。第二は，叙事詩『マハーバーラタ』の翻訳である。その一部である『バガヴァッド・ギーター』に関する三つの論文と，その翻訳の仕事を完了した。第三は，政治論・政策論（ニーティ・シャーストラ）の研究である。すでに『カウティリヤ実利論』（アルタ・シャーストラ）の訳を出版し，目下，カーマンダキの『ニーティ・サーラ』の翻訳及び研究の仕事を続けている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻　サンスクリット戯曲講読　1990年度，サンスクリット文学講読　1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

なし

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本印度学仏教学会，仏教思想学会（評議員），日本仏教学会，比較文明学会，日本南アジア学会。

6．過去の主要業績（1990．3まで）

訳『屍鬼二十五話』東洋文庫325　1978年，共訳『パンチャタントラ』1980年，『インドの詩人』1982年，訳『カウティリヤ実利論』上下　1984年，『インド古典演劇における美的経験――アビナヴァグプタのrasa論』東文研報告　1990年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「Ānandavardhana作　Dhvanyāloka訳注（第3章―1）」『東文研紀要』113　1991年1月，「中世演劇論における『ナーガーナンダ』論争」前田専学編『インド中世思想研究』春秋社　1991年2月，「インド古典演劇論における8種のヒロイン」『日本仏教学会年報』56　1991年5月，「『バガヴァッド・ギーター』における放擲のヨーガ」『国学院雑誌』平成3―11　1991年11月，「Tāpasavatsarāja と Śṛṅgāraprakāśa」『印度学仏教学研究』40―1　1991年12月，『バガヴァッド・ギーター』（翻訳）岩波文庫　1992年3月。

永ノ尾　信悟　えいのお　しんご（1991．4転任）

1．主要略歴

1948．7生，1971　京大・文・哲学卒，1973　京大大学院文学・梵語学梵文学・修士課程修了，1976　同博士課程退学，同年　学術振興会奨励研究員

(1977まで)，1977　西ドイツ・マールブルク大博士課程入学，1980　同退学，同年　九州東海大工学部教養課程専任講師，1984　国立民族学博物館助手，1986　哲学博士（Ph.D. マールブルク・フィリップス大)，1987　同助教授，1989　総合研究大学院助教授併任，1991　東文研助教授。

2．研究活動の概要・研究経過

修士課程在学中より始めた古代インドのヴェーダ祭式研究は1988年に出版した *Die Cāturmāsya oder die altindischen Tertialopfer* に集大成された。その間，ヴェーダ祭式文献の中に見い出される意味不明な語に関する語彙研究や，ヴェーダ祭式解釈文献に特有な論理展開に関する研究を内外の学術雑誌に発表したり，当時の東ドイツ，更にオーストリア，合衆国など内外の学術大会においても発表してきた。1984年から1991年まで国立民族学博物館に勤務したが，その間6回インドに滞在する機会を得た。そのうち3回親しくなった友人のいるビハール州北部のミティラー地方の農村を訪問し，そこで行われるバラモン達の伝統的な宗教儀礼をいくつか見ることができた。現在のインドに伝わっている彼らバラモン達の儀礼は，私が長年文献のみで研究してきた古代インドのヴェーダ祭式とかなり異っていることがわかる。インドの祭式儀礼研究はインド文献学においてあまり大きな関心をもたれてこなかった。ヴェーダ祭式研究はしかし，そのような状況の中でも比較的多くの研究者が研究対象としてきたといえるが，ヴェーダ文献の最新層の文献から徐々に散見され，膨大なブラーナ文献を中心に展開し，現在にまで伝えられることになるヒンドゥー儀礼の変遷を文献学的に解明する作業はほとんどなされていないと思われる。インド滞在中に見ることができた現在のバラモン達の宗教儀礼の実際の在り方を出発点とし，それらが要素的に，古代インドの文献のどこまでさかのぼることができるのか，そもそもヴェーダ祭式が徐々に変容し，ヒンドゥー儀礼はどのようなプロセスを経て展開していったのかという問題を，文献を手掛りに現在解明している。その糸口として，朝夕に行われる日々の勤行や

祖霊に対して行われる祖霊祭，それに，一年の儀礼カレンダーに従って行われる定期的な宗教儀礼などを検討している。ヒンドゥー的宗教慣行の中でヴェーダ祭式になかったものに更に聖地巡礼というものがある。聖地巡礼に関する最初期の記述はマハーバーラタに見られるが，それを始めとするいくつかの文献により，ヒンドゥー教における聖地巡礼の萌芽とその展開に関する検討も行っている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻　印度祭祀文献研究 1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

なし

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本印度学仏教学会，日本南アジア学会，日本民族学会。

6．過去の主要業績（1990．3まで）

"Studien zum Śrautaritual I, II." *Indo-Iranian Journal* 25—1・28—4 1983・85, "Altindische Getreidespeisen" *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 44 1985, "Textkritische Bemerkungen zum Cāturmāsya-Abschnitt des Vārāha-Śrautasūtra", W. Morgenrot, ed., *Sanskrit and World Culture* 1986, *Die Cāturmāsya oder die altindischen Tertialopfer: Dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras* 1988,「Mahādevapūjā——Mithilā 地方の事例報告」『国立民族学博物館研究報告』14—2　1989年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

書評 “Bühnemann, Gudrun: Pūjā, A Study in Smārta Ritual, Leiden: Brill 1988,” *Orientalistische Literaturzeitung* 85/5 1990, 書評 “Smith, Frederick M.: The Vedic Sacrifice in Transition, A Translation and Study of the Trikāṇḍamaṇḍana of Bhāskara Miśra, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute 1987,” *Indo-Iranian Journal* 34 1991, 「ヒンドゥー的世界観に関する民族学的研究」『民博通信』52 1991年3月,「ジャガンナータ信仰とその縁起譚」『民博通信』55 1992年3月,「グリフヤスートラ文献にみられる儀礼変容」『東文研紀要』118 1992年3月。

小倉　泰 おぐら　やすし

1．主要略歴

1959. 9生，1982 東大・法卒，1984 東大大学院人文・比較文化・修士課程修了，同年 東大大学院総合文化・比較文化・博士課程入学，1986 インド国・プーナ大留学（1988まで），1989 東大大学院博士課程退学，同年 東文研助手。

2．研究活動の概要・研究経過

ヒンドゥー教世界における空間の観念を様々な角度から検討することを課題にしている。そのためにまず研究の対象をヒンドゥー寺院に絞り，建築儀礼に表現されている建築空間の観念と，人体のイメージに代表される思考体系との関連について考察した。さらにサンスクリット建築文献の記すマンダラの観念と実際の寺院建築における平面設計の関連に注目し，1990年度は文部省科学研究費（奨励研究）の補助も受け，マンダラの観念とヒンドゥー寺院の伽藍配置との関係を考察して両者の関連を実証的に明らかにした。現在は範囲を都市空間に広げ，個々の建築空間がヒンドゥー教の宇宙論のなかでどのように体系づけられているかを明らかにしようと

している。以上の作業の結果をまとめたものとして，『ヒンドゥー教世界の空間観念（仮題）』の刊行を準備中である（春秋社）。その他の仕事として，フランスの社会学者ルイ・デュモンの，『インド文明とわれわれ』の翻訳を準備中で，近々刊行の予定である（みすず書房）。またサンスクリット叙情詩『ギータゴーヴィンダ』の翻訳も準備している（平凡社）。一方，文部省科学研究費重点領域研究（イスラーム都市の比較研究：板垣雄三氏代表）の研究分担者（1990年度）としてインドにおけるヒンドゥー都市の研究を分担した。

海外学術活動としては，文部省科学研究費海外学術調査（イスラーム都市における空間構成の比較研究：代表　羽田正）の研究分担者として，モスクおよびイスラーム庭園の現地調査（1990年度；インド，1991年度；モロッコ）を行った。また1991年度は文部省科学研究費国際共同研究（中世における南インドと東南アジアの文化交流の再検討：代表　辛島昇）の研究分担者として，ヴェトナムおよびラオスにおけるヒンドゥー寺院についてインドの学者と共同で現地調査を行った。1991年8月から（1992年6月まで），米国ペンシルヴァニア大学に客員研究員として所属し，アメリカン・インスティチュートが過去30年間にわたって収集してきたインド美術についての写真資料をもとに研究を続けている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

なし

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

なし

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本印度学仏教学会，日本南アジア学会，日本比較文学会，東大比較文学会，American Oriental Society（米国東洋学会）。

6．過去の主要業績（1990．3まで）

「地獄と地蔵菩薩」『ユーラシア』新2　1985年，「お地蔵さんとこども——ひとつの文化変容」『比較文学研究』48　1985年，「『カルナの出生譚』訳注（上）（下）」『比較文学文化論集』3－4　1986年，「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性(1)」『東文研紀要』111　1990年2月。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性(2)」『東文研紀要』115　1991年3月，「タミル・ナードゥにおける王権と寺院——王の神格化をめぐって」『東文研紀要』118　1992年3月，「中世都市ヴィジャヤナガル——ヒンドゥー王都のレイアウトとその解釈」『東洋文化』72　1992年3月，「ヒンドゥー寺院とヴァーストゥシャーストラ」「ギータゴーヴィンダと細密画の世界」『インドアンソロジー』（上村勝彦・宮本啓一共編）春秋社（1992年刊行予定）。

西アジア部門

板垣　雄三　いたがき　ゆうぞう（1991. 3 停年退職）

1．主要略歴

1931. 2 生，1953　東大・文・西洋史卒，1956　東大大学院人文・西洋史・修士課程修了，同年　都立竹早高校教諭，1960　東文研助手，1965　アラブ連合出張，1966　帰国，同年　東京外大 AA 研専任講師，1967　同助教授，1971　東大教養学部助教授，東京外大 AA 研助教授併任（1972 まで），1976　エジプト・アインシャムス大客員教授，1981　東大教養学部教授，1985　東大評議員併任，1986　東文研教授，教養学部教授併任（1987 まで），1989　国立民族学博物館客員教授併任，1991　東文研教授を停年退職，同年　東大名誉教授，同年　東京経済大特任教授，同年　国立民族学博物館客員教授。

2．研究活動の概要・研究経過

1960年代までは，エジプトを中心として，18世紀から20世紀にいたるアラブ近現代史の研究に従事した。ことに，アラブ民族主義の形成と展開，「エジプト的性格」論などが主要テーマであった。60年代末より，パレスチナ問題およびそれとの関連においてユダヤ人問題が持続的な研究対象となる。中東紛争の諸局面の分析を通じて，現代中東の政治・社会変動の機構を解明しようとする作業に取り組むこととなった。そこでは，政治過程に作用する中東地域諸社会の集団編成原理ならびに価値意識の変化を重視しながら，また国際関係と社会過程との間の構造的連関に着目しながら，パレスチナ民族主義やイスラーム復興運動などの態様と挙動について考察する仕事を進め，現在にいたっている。70年代半ば以降は，これに加え

て，ペルシア湾岸地域の政治・社会変動を記述し分析するための指標の検討にも，上記の仕事の一環として取り組むようになった。以上の研究作業のなかで，地域設定の可変性，地域研究（地域学）の方法，エスニシティ，オリエンタリズム，イスラム文明の将来像，アーバニズム（都市性）などについての理論的検討を重ねてきた。

この間，個人の研究活動も，しばしば共同研究の組織化の努力と重なりあった。「イスラーム化」，「日本・アラブ関係」，「社会変動とイスラーム」，「イスラームの都市性」等々，国際共同研究を含むあまたの共同研究組織の運営にあたった。このような経過から，研究業績の多くは共編著として発表される。こうして生まれた国内的・国際的協業のネットワークが，中東・イスラーム研究の新生面開拓への跳躍台になったと言えるであろう。日本中東学会の成立もこのような共同研究の積み重ねを前提として可能になった，と考えている。研究活動は教育活動と不可分であった。研究者の層を厚くすること，研究課題の多様化，地域研究の内実の強化，境界領域の開拓と学際的研究態勢の構築のために，懸命の努力を傾注してきた。また，この間，中東・イスラーム研究の成果を社会に向かって提供し，社会的関心を喚起するための活動にも，いささか力を尽くした積もりである。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻　現代アジア論　1990年度，東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学（イスラム学）専攻　現代イスラムをめぐる諸問題　1990年度，東京大学教養学部教養学科　地域研究論III　1990(冬)年度，新潟大学人文学部　東洋文化史　1990年度，専修大学文学部　イスラム史　1990年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

な　し

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本中東学会（会長代行），日本イスラム協会（理事，編集委員），日本オリエント学会（理事），地中海学会，日本アフリカ学会，日本沙漠学会（評議員），日本国際問題研究協会（理事），日本国際政治学会，日本平和学会，史学会（評議員），歴史学研究会，歴史教育研究所（評議員），財団法人中東調査会（理事），財団法人中東経済研究所（理事），日本チュニジア協会（評議員），現代世界と文化の会（編集委員）。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「オラービー運動（1879～1882）の性格について」『東文研紀要』31 1963年，「〈アラブ社会主義〉におけるTabaqa（階級）認識について」『アジア・アフリカ言語文化研究』1　1968年，「世界分割と植民地支配」岩波講座『世界歴史』22　1969年，「民族と民主主義」『歴史における民族と民主主義』青木書店　1973年，『パレスチナ人とユダヤ人』（共編著）三省堂　1984年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

『交感するリビア』（共編著）藤原書店　1990年4月，『「クウェート危機」を読み解く』（編著）第三書館　1990年10月，『世界史への問い8　歴史のなかの地域』（共編著）岩波書店　1990年12月，『中東パースペクティブ』（編著）第三書館　1990年12月，『週刊朝日百科世界の歴史112　民族と国家』（編著）朝日新聞社　1991年1月，『中東湾岸戦争と日本　中東研究者の提言』（編著）第三書館　1991年2月，「1930年代のアラブ地域の民族主義と権力構造」長沢栄治編『地域研究シリーズ10　中東』アジア経済研究所　1991年3月，「中東と日本を結ぶリビア」『機』藤原書店　1990年4月，「若い世代への国家投資」『経営レポート』98　三井銀行総合研究所 1990年5月，「イスラエルとパレスチナ問題」西川潤・森田桐郎編『いま世界政治経済が面白い』有斐閣　1990年5月，「中東・アラブ」同上，「ギリ

シア悲劇と私」『ギリシア悲劇全集月報1』岩波書店　1990年5月，「ヤーファー残照」地中海学会編『地中海文化の旅(1)』河出書房新社　1990年6月，「国際会議トピックス　イスラムの都市性に関する国際会議」『学術月報』43—6　日本学術振興会　1990年6月，「追想・沙漠に立つ石母田さん」『石母田正著作集月報16』岩波書店　1990年6月，「イラン・イラクはなぜ戦ったのか」歴史教育者協議会編『100問100答世界の歴史』河出書房新社　1990年8月，「西欧人の流儀と現代日本人」『17・18世紀大旅行記叢書内容見本』岩波書店　1990年8月，「研究所設立や文化交流を」『AERA』34　朝日新聞社　1990年8月，「英仏・米ソの中東支配態勢の崩壊」『変革をめざして』143　左翼連合全国幹事会　1990年9月，「〈国家〉に見る中東」『東京大学新聞』1990年9月11日，「米ソ覇権の衰退が招いた湾岸危機」『エコノミスト』毎日新聞社　1990年9月，「アラブ世界の情報感覚」『広告批評』マドラ出版　1990年10月，「中東問題のポイント」『木村経済レポート』19—10　木村経済研究所　1990年10月，「中東と世界の政治地図を激変させる湾岸危機」『世界週報』71—38　時事通信社　1990年10月，「中東危機の背景と今後の展開」『山陰中央新報』1990年10月20・21日，「クイズアラビア半島」『季刊民族学』54　千里文化財団　1990年10月，「長期化する中東湾岸危機」『日本農業新聞』全国新聞情報農業協同組合連合会　1990年10月21日，「世界を揺るがすイラクの侵攻」『フォト』37—21　時事画報社　1990年11月，「アラブ文化としてモルーヘイヤ」全国モロヘイヤ普及協会編『奇蹟の栄養野菜モロヘイヤ』静山社　1990年11月，「中東情勢をどう読むか」『生涯フォーラム』1093　社会教育協会　1990年11月，「アラブ世界の行方と日本の対応」『晋和』晋和会　1990年12月，「『モゴール族探検記』の語るもの」『梅棹忠夫著作集4　中東の国ぐに』中央公論社　1990年12月，「〈中東湾岸危機〉と歴史の流れ」『平民会議』95　平民会議事務局　1990年12月，「パレスチナをもっと知るために」『会報』156　日本工業倶楽部　1990年12月，「中東の〈諸国家体制〉とアラブ民衆」『アラビア半島の戦争を考える』信原孝子さんを支える会　1990年12月，「第

2回世界青年の船の成果」『平成元年度「世界青年の船」(第2回)報告書』総務庁青少年対策本部　1990年12月,「中東」『知恵蔵1991』朝日新聞社　1991年1月,「パレスチナ問題が焦点」『連合通信』5710　連合通信社　1991年1月,「〈湾岸危機〉の構造と変わる中東政治地図」『世界から』150　アジア太平洋資料センター　1991年1月,「中東問題の展望」『第7回エネルギーシステム・経済コンファレンス講演論文集』エネルギー・資源学会　1991年1月,「イスラムの論理と心理」『朝日新聞』1991年1月24日夕刊,「アフガーニーのメッセージ」『週刊朝日百科　世界の歴史111』朝日新聞社　1991年1月,「アラブ側の湾岸戦争」『東京大学新聞』1991年1月29日,「中東問題を理解するために」『婦人新報』1085　日本キリスト教婦人矯風会　1991年2月,「パレスチナ問題の解決なくしては」『婦人民主新聞』1991年2月8日,「中東危機とイスラーム」都市文明イスラームの世界事務局編『第5回「大学と科学」公開シンポジウム都市文明とイスラームの世界予稿集』クバプロ　1991年2月,「どうする湾岸支援」『北海道新聞』1991年2月19日,「湾岸戦争後の中東」『西日本新聞』1991年3月6日,「崩壊する中東諸国体制」『情況』1991年3月,「中東の平和と人権を考える」『キリスト新聞』1991年3月9日・16日,「緊迫する湾岸危機の構造」『立命館国際研究』3－4　立命館大学国際関係学会　1991年3月,「中東危機とアラブ民族主義」『国際問題研究』38　日本国際問題研究協会　1991年3月,「いまアラブをどう理解するか」『アラブ』56　日本アラブ協会　1991年3月,「第三世界をめぐって」江口朴郎先生追悼集編集委員会編『思索する歴史家江口朴郎［人と学問］』青木書店　1991年3月,「湾岸危機」『世界現勢1991』平凡社　1991年3月,「平成2年度科学研究費補助金〈国際学術研究に関する総合調査研究〉研究連絡会・報告―西アジア・アフリカ」『海外学術調査ニュースレター』18　国際学術研究総括班(東京外国語大学AA言語文化研究所)1991年3月。

鈴木　董　すずき　ただし

1．主要略歴

1947. 9 生，1970　東大・法卒，1972　東大大学院法学・政治・修士課程修了，同年　同博士課程入学，同年　トルコ国・イスタンブール大留学（1975 まで），1979　東大大学院博士課程退学，同年　学術振興会奨励研究員，1980　立大法学部助手，1982　同退職，同年　千葉大教養部等非常勤講師，同年　東大大学院法学・政治・博士課程修了，法学博士（東大），1983　東文研助教授，1991　東文研教授。

2．研究活動の概要・研究経過

現在，方法的関心の中心は政治社会史にあり，研究対象は，かつてのオスマン帝国を中心とする西アジア地域である。研究テーマとしては，オスマン帝国のケースを中心に，イスラム世界における　1）国家の支配組織と支配エリート，2）世界秩序・政治的統合・アイデンティティー，3）文化と社会の特質，の三分野にわたっている。

そのうち，最も中心をなすのは1である。前近代オスマン帝国の支配組織と支配エリートについては，大学院在学中からトルコ留学をへて今日に至るまで，研究を続けてきた。この分野での研究は，一応，1982年の博士論文（未刊）でまとめられた。その後，新史料を加え検討を進め，その結果の一端は，“Governance Structure of the Ottoman Empire”(1989年）等として公表した。

巨視的分析の実証的基礎としての，文献学的考証に基くプロソポグラフィー的研究の一部は，「スレイマン大帝時代の大宰相と宰相たち㈠～㈢」（1986～8年）等として刊行した。また『トルコ社会経済史国際会議』（イスタンブル，1989年）の報告書中でのトルコ語論文，及び『トルコ歴史学会議』（アンカラ，1990年）でのトルコ語口頭発表もなされている。

支配エリートの組織観の変遷については，「後期オスマン帝国における没落観と改革論」(1992年) がある。

2のテーマについては，前近代イスラム世界における世界秩序観，政治的統合とアイデンティティーの特質と，近代西欧の衝撃下での変化について，「中東イスラム世界に於ける国際体系の伝統と西洋の衝撃」(1982年) 以下，一連の巨視的試論を発表してきた。世界秩序観のより制度化された形態についての検討の一端は「一八世紀初頭オスマン帝国の遣欧使節制度と『使節の書』」(1989年) で示した。

第3の分野である文化と社会の特質については，主としてオスマン都市，特に帝都イスタンブルに焦点をすえて，研究を進めつつある。この方面での研究では，友杉教授の班研究「アジア都市比較の課題と方法」の共同研究，及び板垣教授の重点領域研究「イスラムの都市性」研究プロジェクトにより研究上の知見を拡げることを得た。この方面での研究の最近の成果の一端としては，「チューリップ時代のイスタンブルにおける詩人と泉」(1992年) がある。

3．教育活動 (1990．4～92．3)

東京大学大学院法学政治学研究科　中東伝統国際秩序観研究　1990,91年度，東京大学教養学部　アジアの政治変動　1990年度，筑波大学国際関係学類　比較文明論　1990年度，慶応義塾大学大学院文学研究科　東洋史特殊講義　1991年度，慶応義塾大学文学部　東洋史特殊Ⅰ　1991年度，上智大学外国語学部　イスラム政治文化論　1991年度，　成蹊大学法学部　アジア研究第3　1991年度。

4．学内行政事務分担 (1990．4～92．3)

東京大学大学院法学政治学研究科委員会 (1989年4月～1991年3月)，同二号委員 (1991年4月～1993年3月)。

5．学外活動（1990．4～92．3）

地中海学会（事務局員・『地中海学研究』編集委員），日本中東学会（『日本中東学会年報』編集委員・評議員），日本オリエント学会（『オリエント』編集委員），比較法史学会（理事），日本国際政治学会（評議員）。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「オスマン・トルコ社会思想の一側面 ── 有機体的社会観の展開」『イスラム世界』14　1978年，「スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち㈠－㈢」『東文研紀要』101・103・106　1986～88年，「一八世紀初頭オスマン帝国の遣欧使節制度と『使節の書』」『東洋文化』67　1987年，「イスラム国際体系」『講座国際政治』1　1989年，「『近代軍』形成期のオスマン帝国における軍人と政治 ── 1826～1908年」『政治学年報』1989年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「イスラム帝国の戦争と平和 ── オスマン帝国と近代西欧国際体系」『週刊朝日百科　世界の歴史』77　1990年5月20日，「オスマン帝国と対外的コミュニケーション」『世界史への問い』岩波書店　1990年5月，「18世紀初頭オスマン朝の一官人の経歴について」『日本オリエント学会創立35周年記念　オリエント学論集』1990年7月，「イブラヒム・パシャの時代」『週刊朝日百科　世界の歴史』88　1990年8月5日，“Kanunî Sultan Süleymanın Vezirazamlar ve Vezirleri,” V. Milletlerarası Türkiye Sosyal ve İktisat Tarihi Kongresi Tebliğleri, Ankara, 1990，「帝都からメガロポリスへ：近代イスタンブルの1世紀半　1826～1990」『イスラムの都市性全体集会報告書』1991年9月，「後期オスマン帝国における没落観と改革論」『東文研紀要』118　1992年3月，「チューリップ時代のイスタンブルにおける詩人と泉」『東洋文化』72　1992年3月。

松谷　敏雄　まつたに　としお

1．主要略歴

1937．3生，1961　東大・教養・教養卒，1963　東大大学院生物・人類学・修士課程修了，1965　同博士課程退学，同年　東文研助手，1971　同退職，同年　東大教養学部非常勤講師，1972　埼玉大教養学部非常勤講師，同年　東文研専任講師，1974　同助教授，1984　同教授，1992　東文研所長及び東大評議員並びに文献センター長。

2．研究活動の概要・研究経過

関心は今から一万年ほど前にメソポタミアの地でおこった，農耕や牧畜という食料生産経済の開始と，その新しい経済に基礎を置く農耕村落の初期の様相にある。これを研究するために，イラン・イラク・シリアの3カ国で遺跡の発掘調査によって情報を集めてきた。

最初に参加した1964年の調査の際，幸いなことに，イラクのテル・サラサート遺跡第2号丘の最下2層XV，XVI層でハッスーナIa期の文化を掘ることができた。当時この文化層の文化史的位置づけは十分になされていたとはいえない。これを，より高度の高いカシ＝ピスタチオ疎林地帯で野生植物の栽培化に成功した人々が，野生種は分布していないが天水農耕の可能なアッシリアン・ステップに降りてきて形成した最初の農耕村落の文化という見通しを立てたのである。

その後，イギリスのウム＝ダバギーヤ遺跡，ソ連のヤリム・テペI号丘，テル・ソット遺跡の発掘調査によって，この見通しが正しいものであることが補強された。

そこで，テル・サラサート遺跡第2号丘でさらなる情報収集の必要性が生じた。1976年に，同遺跡の再調査を行い，当時の村落の様相を明らかにした。

イラクの考古当局のダム建設に伴う水没地の遺跡の発掘以外は発掘調査を許可しない方針，またイラン・イラク戦争の勃発によってイラクでの現地調査は中断された。戦争の終結を待ち望んでいたが，なかなか終焉しそうにないため，調査地をシリアに切りかえることにした。1984年のことである。

1985年の夏休みを利用してシリアに赴いた。シリアでも水没地の遺跡発掘を優先していた。幸運なことに，水没地の遺跡のなかにハッスーナ Ia 期の文化層を持つとみなされるテルが見つかった。カシュカショクII号丘である。1987～88の両年の発掘によって，この遺跡に当時の文化層が横たわっていることを確認した。東北シリアでハッスーナ Ia 期の遺跡が発掘されたのは，これが初めてのことであり，シリアばかりでなく他の国の研究者に大きな刺激を与えた。

その後，フランス隊の分布調査によって，この時期の文化層を包含する遺跡が次々とみつかってきた。これからは，これらの遺跡のいくつかを発掘し，東北シリアにおけるハッスーナ Ia 期の文化の様相を明らかにしていきたいと考えている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻　文化過程論演習 I　1990年度，文化人類学　文化人類学特殊研究II　1990年度，文化過程論演習II 1991年度，文化人類学特殊研究III　1991年度，東京大学教養学部教養学科先史人類学　1990(夏)年度，文化人類学演習　1990(冬)年度，先史人類学 1991(冬)年度，青山学院大学文学部　史学特講IV　1990年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

放射性炭素年代測定装置委員会（1990年4月～1992年3月），総合文化研究科3号委員（1990年4月～1992年3月）。

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本民族学会，日本オリエント学会（理事・『オリエント』編集委員長），日本学術会議・東洋学連絡委員会委員，古代オリエント博物館評議員，流沙海西奨学会運営委員長。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「初期農耕村落」『東文研紀要』47　1967年，「ピゼとチネ」『東文研紀要』58　1972年，編 *Telul eth-Thalanthat*　東文研報告　III—IV　1975～81年，共編 *Halimehjan*　東文研報告　I－II　1980～82年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「初期の農村遺跡カシュカショクII号丘［シリア］」『文明の発祥地からのメッセージ』クバプロ　1990年8月，「楽になった海外調査」『海外学術調査ニュースレター』17　1990年12月，（編著）*Tell Kashkashok, The excavations at Tell No. II,* The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo, 1991年3月，「考古美術部門（部門紹介）」『東京大学総合研究資料館ニュース』22　1991年7月，「イラン・イラク・シリアでの発掘調査」『東洋文化研究所の50年』東洋文化研究所　1991年11月，「集落の始まり」『事典イスラームの都市性』亜紀書房　1992年2月，「ラメ・ザミーン遺跡出土の加工痕のある3点の骨について」『東文研紀要』118　1992年3月。

羽田　正　はねだ　まさし

1．主要略歴

1953．7生，1976　京大・文・史学卒，1978　京大大学院文学・東洋史・修士課程修了，同年　同博士課程入学，1980　フランス国・パリ第3大留学，1983　イラン学第3期博士（パリ第3大），同年　帰国，1984　京大大学

院博士課程退学，同年　学術振興会奨励研究員（1985 まで），1985　京大文学部研修員（同年 9 月まで），同年　学術振興会特別研究員，1986　京都橘女子大助教授，1989　東文研助教授。

2．研究活動の概要・研究経過

統一的であると同時に多様性をも有するイスラム世界の中で，特に前近代イラン・イスラム世界を研究対象とし，歴史上の様々な局面に見られるその特徴を抽出，解明することに努めてきた。

研究の第一段階（1978〜87）では，サファヴィー朝国家（16〜18世紀）の有したトルコ・モンゴル系遊牧民的な性格に着目し，従来の「サファヴィー朝国家の成立＝イラン民族王朝の成立」という歴史理解を再検討した。いくつかの論文がこのために著わされたが，シャー・アッバースの改革の評価をも含めた最終的な結論は，パリ第三大学に学位請求論文として提出され，1987年に出版された（*Le chah et les Qizilbās*）。

研究の第二段階は，都市とその社会に見られるイラン・イスラム世界的な特徴を検証することにあてられている。伝統的にイラン社会で強い影響力を持っていた都市名家の活動を，国家権力との関わりの中であとづけること，トルコ・モンゴル系の遊牧君主がイニシアティブを持って推進した庭園（バーグ）を重視する都市プランの実際とその系譜を明らかにすること，これらを総合して前近代イラン都市の特徴を明らかにすることなどが現在の中心的な研究テーマである。また，その過程で，従来の研究史を整理することが必要となり，イスラム世界の他地域を専攻する研究者との共同作業を行った結果，従来のヨーロッパ的な「イスラム都市」研究の持つ方法論的な問題点を明らかにすることもできた（『イスラム都市研究』1991年）。

これまでの研究が主として文献史料に基づき，広義のイラン文化圏を対象とするものだったのに対し，1991年度からは，文部省の科学研究費補助金を得て，現地調査をも積極的に実施し，研究の幅を広げることを試みて

いる。具体的には，庭園やモスク，マドラサを実際に目で見て，建築様式の発展や変化を追い，その都市社会との関わりかたを調査・考察すること，イスラム世界内部における歴史的な意味での複数の地域の存在の確認と，それぞれの地域文化の特徴などである。このため，現在進行中の調査は，イラン世界を意識しながらも，アラブやトルコ，インド世界にも目を配ったものであり，これらの地域の専門家や建築学者と共同で行なわれている。これにより研究は第三段階に入ったと言えるかもしれない。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻　イラン・イスラム文化研究 1990，91年度，東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻　アジア地域文化構造論　1990年度，アジア地域文化相関論　1991年度，東京大学文学部　西アジアの社会と文化　1990年度，慶応義塾大学文学部　東洋史学特殊講義Ⅰ　1991年度，慶応義塾大学大学院　東洋史学特殊講義Ⅱ 1990，91年度，大阪大学文学部　東洋史学特殊講義　1991年度，東京外国語大学　イラン事情特殊研究　1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

な　し

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本中東学会（評議員・『年報』編集委員），日本オリエント学会，日本イスラム協会，東方学会，史学会，東洋史研究会，史学研究会，西南アジア研究会，日仏東洋学会（評議員・会計担当幹事），Société asiatique／Association pour l'avancement des études iraniennes, Société d'Histoire de l'Orient.

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「コルチ考 ── 16世紀イランの近衛兵制度」『史林』67－3　1984年，「後期イスラム国家の支配 ── サファヴィー朝の場合」『講座イスラム』2　1985年，「フーザーニー家の人々 ── 東方イスラム世界における一名家の歴史」『史学雑誌』96－1　1987年，「メイダーンとバーグ ── シャー・アッバースの都市計画再考」『橘女子大学紀要』14　1987年，*Le châh et les Qizilbâs. Le système militaire safavide,* 1987.

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

『イスラム都市研究 ── 歴史と展望』（共編著）東京大学出版会　1991年7月，"Maydān et Bāġ. Reflexion à propos de l'urbanisme du Šāh 'Abbās", *Acte du Colloque Franco-Japonais sur les documents provenant de l'Asie Centrale,* 同朋舎　1990年4月，「牧地都市と墓廟都市 ── 東方イスラム世界における遊牧政権と都市建設」『東洋史研究』49－1　1990年6月，"Cerkes. The Safavid Period", *Encyclopaedia Iranica* 3－8　1990，「スルタン・スレイマンとシャー・アッバース－ムスリム君主の墓廟観」『歴史と地理』219　1991年5月，「1676年のイスファハーン ── 都市景観復元の試み」『東文研紀要』118　1992年3月，「シャー・アッバースとアルメニア人」岡崎正孝編『中東世界』世界思想社　1991年12月，「イランにおける都市と都市集住の歴史入門　書評」『東洋学報』1991年3月，「『マムルーク』書評」『日本中東学会年報』7　1992年4月，「都市の研究史・イラン」「宮廷と都市・イラン」「都市と美術・モスク建築」「イスファハーン」『事典　イスラームの都市性』亜紀書房　1992年2月，「Sir Gore Ouseley コレクションについて」『図書館の窓』1992年3月。

後藤　明　ごとう　あきら

1．主要略歴

1941. 7 生，1965　東大・文・東洋史卒，1967　東大大学院人文・東洋史・修士課程修了，同年　東洋文庫研究生，1968　同附置ユネスコ東アジア文化研究センター研究員，1978　山形大人文学部助教授，1986　同教授，1987　東文研教授。

2．研究活動の概要・研究経過

中東地域を中心とするイスラーム世界の社会構造を歴史的視点から研究することが私の専門的研究の内容である。そして，その分野での私自身の研究成果を基礎に，地球規模の人類史を語ることが，私の研究活動の目的である。イスラーム世界は本質的に都市社会であり，イスラーム文明は都市文明ではないか，ということを前提に，人類史・人類社会における都市的なものの総体を理解しようとつとめた，文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」プロジェクトにおいて私は，計画の第 3 年度にあたる1990年度においては，初年度・第 2 年度に引き続いて領域の副代表をつとめ，計画の取りまとめの年度である91年度においては，領域代表であった板垣教授の退官にともなって，領域代表の役をになった。この「イスラムの都市性」プロジェクトの実行にあたったことが，私の研究活動の概要であり，経過である。

上記プロジェクトの実行にあたって，都市とは本質的に自由な存在である，と主張してきた。それは，特定の範囲の人々に市民権を与え，市民権を有する人々だけが都市の政治にあたるのが本来的な都市であるとする，従来の都市論の根幹を否定する考えであった。市民という閉鎖的な身分・階層をつくることなく，誰もが自由にそこに留まり，そこが気にいれば移住し，また別な機会を求めてそこから離れる，そのような自由な空間が都

市ではないのか，そのような自由な都市の社会構造，秩序のありよう，その秩序を支える政治倫理や法律などの解明を，プロジェクトを通しての研究の私の具体的な目的として，実施にあたってきた。個人のレベルでは，イスラームが勃興した7世紀のメッカ社会が，部族社会ではなく「自由都市」を維持していた社会であることを説いてきた。1990年7月には，イスラエルのヘブライ大学で開催された「ジャーヒリーアからイスラームへ」国際シンポジウムで，イスラーム勃興時のアラブ社会は「部族社会」ではなかったことを内容とする研究発表を行い，同年11月に東京で開催された「イスラームの都市性」第2回国際シンポジウムでは，ひとつのセッションを主催し，その基調報告で「部族社会」に代わる個人間の契約に基づくメッカ社会像を提供した。

新しい歴史像に基づく地球規模の人類史は，私の頭のなかで形成過程にある。その概要を，92年1月から3月にかけて，総務庁主催の第4回「世界青年の船」に主任指導官として参加して，日本を含む世界の13カ国の青年に語り，討議してきた。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻　現代イスラム論　1990年度，アジアの思想・宗教　1991年度，東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学（イスラム学）専攻　ムハンマド伝研究　1990，91年度，東京大学教養学部教養学科　西アジア地域論　1991年度，中央大学大学院文学研究科東洋史専攻　西アジア史研究　1990，91年度，慶応義塾大学文学部　西アジア地域史　1990，91年度，筑波大学大学院　イスラーム思想研究　1990年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

大学院総合文化研究科研究科委員会（～1991年3月）。

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本中東学会（理事），日本オリエント学会（理事・『欧文オリエント』編集委員），日本イスラム協会（理事・『イスラム世界』編集委員），史学会（評議員），砂漠学会，国立民族学博物館「地域研究の推進方策に関する調査委員会」委員（1990年度），「地域研究の推進体制に関する調査委員会」委員（1991年度），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「アラブ戦士集団の成立」『歴史学研究』382　1972年，『ムハンマドとアラブ』1980年，「自由都市メッカ」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』1983年，「『コーラン』にみえる預言者とその民」『東洋学報』66　1－4　1985年，「ムハンマド伝の史料に関する覚書Ⅰ－Ⅱ」『山形大学史学論集』5・7　1985－87年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

『メッカ――イスラームの都市社会』（中公新書）中央公論社　1991年3月，『シリーズ　世界史への問い』全10巻（共編）　岩波書店　1989―91年，『事典　イスラームの都市性』（板垣雄三と共編）亜紀書房　1992年2月，「ムハンマドと初期イスラーム世界の権力」『シリーズ　世界史への問い7　権威と権力』岩波書店　1990年10月，「ムハンマド伝の資料に関する覚え書き――ハディース」『東文研紀要』118　1992年3月，「アラブの黄金時代」『AERA』39　1990年10月，「座談会　アラブを知ろう」『CONCOURSE コンコース』152　1990年12月，「アラブは西欧中心史観をゆるがす」板垣雄三編『中東パースペクティブ』第三書館　1990年12月，「イスラームは都市にはじまる」『都市文明イスラームの世界――シルクロードから民族紛争まで』クバプロ　1991年9月，「地球規模での人類史の構築を目指して」『金沢経済大学論集』25－3　1992年3月，「『イスラムの都

市性』プロジェクト私の総括」文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」事務局『マディーニーヤ』37　1991年1月（清水宏祐編『イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究』東京外国大学1991年2月），「コーランを読む」『さわやかクラブ』1　1991年1月，座談会「湾岸危機・中東と日本」板垣雄三編『中東湾岸危機と日本』1991年2月，「古代漂流 79 都市を生んだ文明」『朝日新聞・大阪版』夕刊　1991年2月15日，「古代漂流 80 神々の世界の終焉」『朝日新聞・大阪版』夕刊 1991年2月22日，「古代漂流 81「神への服従」興る」『朝日新聞・大阪版』夕刊　1991年3月1日，「古代漂流 82「自由都市」メッカ」『朝日新聞・大阪版』夕刊　1991年3月8日，「古代漂流 83 ギリシャ文化の継承」『朝日新聞・大阪版』夕刊　1991年3月15日，「古代漂流 84 イスラムの都市性」『朝日新聞・大阪版』夕刊　1991年3月22日，「イスラームそして都市的心性」『教育時報』1991年6月，「ジャーヒリーヤからイスラームへ――第5回国際コロキウム」『オリエント』33－2　1991年3月，「はじめに」『イスラムの都市性・研究報告』研究会報告編　27　1991年3月，「マホメット『アッラーの預言者』アラビアの地に立つ」『プレジデント』1991年4月，「佐藤次高著『マムルーク』」『産経新聞』夕刊　1991年3月9日，「岡正雄・江上波夫・井上幸治編『民族の世界史Ⅰ・民族とは何か』」『歴史と地理』438　1992年2月20日，「片倉もとこ著『イスラームの日常世界』」『民博通信』55　1992年3月，「黒田壽郎著『イスラームの反体制――ハワーリジュ派の世界観』」『産経新聞』夕刊　1991年9月5日。

鎌田　繁　かまだ　しげる

1．主要略歴

1951．3生，1974　東大・文・宗教卒，1976　東大大学院人文・宗教・修士課程修了，同年　同博士課程入学，1977　カナダ国・マックギル大留学

(1979－80　1981)，1981　帰国，1982　東大大学院博士課程退学，同年　東大文学部助手，1984　同退職，同年　東京外大外国語学部非常勤講師，同年　東文研助教授，1989　カイロ出張，1990　帰国。

2．研究活動の概要・研究経過

人間は常に自分は一体何者であるかを問い続け，人間とは何かの問いは，人間の究極的運命，救済の観念に結び付く形でさまざまな人間論を生み出す。この問いおよびその答えはいかに多様であれ，常に問う者が置かれた文化的環境によって規定されてきた。イスラームという宗教体系のなかで人間はどのような自己理解を示しているか，それを探ろうというのが研究の出発点である。

人間の本来の姿の実現，あるいは救済の実現，は心のあり方をいかに認識しいかに変容させるかにかかっており，人間の宗教的「心」の分析に強い関心を抱いた。これは具体的には，イスラームの神秘家が内省の結果生み出した体験の深まりの記述を分析し整理することであった。このような関心から「サッラージュの神秘階梯説」(1977)，"A Study of the Term *Sirr (Secret)* in Sufi *Laṭā'if* Theory" (1983) が書かれた。この関心の延長上にあり，宇宙論的な位置づけをも考慮しようとしたものに『モッラー・サドラーの霊魂論』(1984) や "The First Being: Intellect ('aql/khiradh) As the Link Between God's Command and Creation According to Abū Ya'qūb al-Sijistānī" (1988) がある。

神秘主義的な主題を扱っている間に，比較的初期のスンニー的神秘主義からイスラームの流れのなかでは傍流とされるシーア派における神秘思想に触れるようになり，やがて重点をそちらに移し，その代表的思想家のひとりであるモッラー・サドラーについていくつかの論文を書くようになった。上記のもののほかに「モッラー・サドラーの輪廻 (tanāsukh) 思想」(1985)，「モッラー・サドラーの『万有帰神論』訳注」(1986) などがある。現在も引き続きこのシーア派神秘思想を主要な研究領域としている。しか

しこの神秘思想もシーア派の知的環境の中で展開したものであり，それに対する目配りなくしては正しい理解には至らないと考え，シーア派の知的営為の総体を常に視野に入れるよう努力している。特にシーア思想の中核を形成するイマーム論を通して多彩なシーア思想を総合的に捉えられないかと模索しており，その基礎作業の一環として「ファイド・カーシャーニーのイマーム論における神秘主義的位相」(1989)，「アッラーマ・ヒッリーのイマーム論」(1992) を発表した。

3．教育活動（1990．4～92．3）

東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学（イスラム学）専攻　イスラム思想文献研究　1990，91年度，東京大学文学部　イスラム史概説（シーア・イスラムの成立と展開）1990年度，同（シーア・イスラム思想研究）1991年度，東京大学教養学部教養学科　イスラム思潮　1991(冬)年度，上智大学外国語学部　イスラム思想研究　1990，91年度，信州大学教養部　地域研究　1991年度。

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

な　し

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本宗教学会，日本オリエント学会（和文『オリエント』編集委員），日本イスラム協会，宗教史学研究所，宝積比較宗教文化研究所（理事）。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「サッラージュの神秘階梯説」『オリエント』20－1　1977年，『モッラー・サドラーの霊魂論――『真知をもつ者たちの霊薬』校訂・訳注並びに序説』1984年，「モッラー・サドラーの『万有帰神論』訳注」『東文研紀要』100　1986年，“The First Being: Intellect (‘aql/khiradh) As the Link

Between God's Command and Creation According to Abū Ya'qūb al-Sijistānī"『東文研紀要』106　1988。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「イスラームにおける救済の前提――スンニー及びシーア・ハディースにおけるイマーム観」吉田泰編『救済の諸相』（宗教史学論叢2）山本書店 1990年，「イスラーム神秘思想における時間――モッラー・サドラーとシャムスッディーン・ダイラミー」『日本オリエント学会創立三十五周年記念オリエント学論集』日本オリエント学会編　刀水書房　1990年，「アッラーマ・ヒッリーのイマーム論――『意図の解明・教義学綱要注釈』第五章訳注」『東文研紀要』118　1992年3月，「庭園のイデア」『事典　イスラームの都市性』亜紀書房　1992年，「イスラームにおける権威の構造」『現代宗教学』4（権威の構築と破壊）脇本平也・柳川啓一編　東京大学出版会（1992年9月刊行予定），"Metempsychosis *(tanāsukh)* in Mullā Ṣadrā's Thought", *Taḥqīqāt-i Islāmī*（1992年刊行予定）。

林　佳世子　はやし　かよこ

1．主要略歴

1958.11生，1981　お茶大・文教育学部・史学卒，1984　同大学院人文科学・史学・修士課程修了，同年　東大大学院人文・東洋史・博士課程入学，1984　トルコ国・イスタンブル大留学（1986まで），1988　東大大学院博士課程退学，同年　東文研助手。

2．研究活動の概要・研究経過

これまでの研究では，イスラム世界の都市を，その空間構造と社会システムの両面で特徴づける「ワクフ制度（宗教寄進制度）」研究を主要な

テーマとしてきた。具体的な対象地域としては，主として，オスマン帝国時代のイスタンブルを扱っている。

都市空間とワクフ制度の関わりでは，都市の建築事業に果たしたワクフ制度の役割の解明が重要なテーマのひとつである。その具体例を明らかにする目的から，イスタンブルの再建過程を「15世紀後半のイスタンブル」(1982) に整理した。その後，イスタンブルへの留学の機会を得 (1984〜86)，トルコ共和国総理府文書局やトプカプ宮殿文書館をはじめとするアーカイヴでワクフ文書などの未刊行の文書史料を収集することができた。それをもとに，イスタンブル再建の基本史料であるメフメト2世のワクフ文書群に関して，その成立過程を明らかにする研究論文を発表している (1988)。

都市の社会システムとしてのワクフ制度の運用の実態に関しては，まず，代表的なワクフ施設であるイマーレット (救貧施設) の運営について，具体的な情報を整理した (1989)。現在は，モスクを中心とする大規模な宗教施設複合体の運営について，1990年の在外研究，1991年の文部省国際学術研究による海外調査の期間中にイスタンブルの諸アーカイヴにおいて収集しえたワクフ収支簿台帳類をもとに，整理をすすめている。また，ワクフ寄進という行為の多様性と都市民のメンタリティの一端を明らかにするという目的から，都市民が住宅をワクフ寄進する事例について検討を加えた (1992)。

以上のように，これまでの研究では，トルコ共和国の諸アーカイヴに残る文書史料を基本史料として用いてきた。アラビア語やトルコ語で書かれ，膨大かつ未整理の状態にあるこれらの史料を，有効に利用するためのコンピュータ利用の方法を検討することも，ひとつの研究テーマである。

1989年，91年には，文部省国際学術研究により，おもに中東地域の諸都市を中心として，都市の空間構造に関して調査を行う機会を与えられた。こうした現地調査と文書研究をあわせ，「ワクフ制度」の実態の解明を軸に，オスマン朝都市に共通する特徴を明らかにしていくことを，現在の課

題としている。

3．教育活動（1990．4～92．3）

なし

4．学内行政事務分担（1990．4～92．3）

なし

5．学外活動（1990．4～92．3）

日本中東学会，日本オリエント学会，史学会。

6．過去の主要業績（1990．3 まで）

「15世紀後半のイスタンブル――メフメト2世の復興策を中心に」『お茶の水史学』25　1982年，「メフメト2世のワクフ文書」群の成立」『日本中東学会年報』3(2) 1988年，「イスラム都市における「イスラム」――都市を支えたワクフ制度」『創文』291　1988年，「イスラム都市のイメージ3：イスタンブル」『イスラムの都市性・研究報告』研究会報告編6　1989年，「イスラム都市の慈善施設「イマーレット」の生活」『東洋文化』69　1989年。

7．過去2年間（1990．4～92．3）の研究業績

「トルコの都市の商業空間について」清水宏祐編『イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究』東京外国語大学　1991年，「史料としてのワクフ」『イスラムの都市性・研究報告』研究会報告編30　1991年，「トルコ」羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究――歴史と展望』東京大学出版会　1991年，「16世紀イスタンブルの住宅ワクフ」『東文研紀要』118　1992年，「都市とワクフ――トルコ」「都市と聖者廟――トルコ」「都市研究史――トルコ」「イスタンブル」『事典　イスラームの都市性』亜紀書房　1992年。

X　附属東洋学文献センター

東洋文化研究所附属東洋学文献センターは，1966年（昭和41年）に設置されて以来，アジア研究の為の基本資料（中国・朝鮮関係図書，中国新聞・雑誌の影印本類，アラビア語写本蒐書「ダイバーコレクション」等アジア諸地域の文献，アジア各地の新聞）の収集を積極的に行い，これと並行して『東洋文化研究所漢籍分類目録』，1991年度までに合計80輯を数える『東洋学文献センター叢刊』等のドキュメンテーション・サービス活動を進めてきた。その他に，毎年全国各地の漢籍整理担当職員に対して研修を実施し，漢籍所在調査，朝鮮関図書所在調査，漢籍貴重書複本化作業等を行っている（その具体的な内容は，1～5をご参照頂きたい）。

しかし近年，東洋学文献センター（以下，本文献センターと略す）の情報サービス活動に対する要請はますます多様化しており，国内・国外におけるアジア研究資料の所在調査，現代中国書・朝鮮関係図書を始めとする非ローマ字言語資料の冊子体目録の作成と共に，データベース化を促進してサービスの飛躍的拡充を図る事が求められている。

従って，本文献センターは現在の事業を強力に推進すると同時に，東洋文化研究所が所蔵する貴重な資料や文献情報を出来るだけ利用しやすいリファインされた形で提供できるよう，情報検索システムの活用と長期的展望に基く資料調査を遂行する所存である（6～7をご参照頂きたい）。

1．資料収集

本文献センターは設立当初から近代・現代中国書，前近代中国書及び近現代

朝鮮関係文献の資料収集と整理を進めており，本研究所未収の漢籍で他機関が所蔵する貴重書は，これをマイクロフィルムにより収集している。

また，1981年度以来，清末・民国初年に刊行された新聞・雑誌の影印本類を収集し，閲覧に供している。さらに，近年広くアジア全域の現代社会研究が要請されているのに鑑み，本文献センターは1989年度からは中国のみならず東アジア・東南アジア・西アジア地域の新聞を全面的に収集している。

その他，1987年度にはダイバー博士旧蔵のアラビア語写本蒐書を「大型コレクション」として購入し，その目録を刊行した。

2．漢籍所在調査

1990～91年度は広島大学附属図書館所蔵斯波文庫の調査と目録原稿の作成を行った。広島大において，この調査を基礎として簡略目録を編集中であり，本文献センターも引き続き最終的な調査を行うことにしている。

更に，新規に東洋文化研究所の現代中国書（約３万点）の冊子体目録及びデータベースの作成を準備している。

3．朝鮮関係図書所在調査

本文献センターは，かって『東洋学文献センター叢刊』として，『朝鮮研究文献目録』（単行書篇，論文・記事篇）を1970～72年に刊行したが，同書に未収録の文献も多く，これらを加えた朝鮮関係図書所在目録が国内・国外から強く要請されている（８をご参照頂きたい）。現在その基礎資料を作成すると共に全国の図書館の蔵書調査を計画中である。

4．漢籍整理促進事業

1980年度から毎年漢籍整理長期研修を実施している。諸大学・公立図書館の漢籍整理担当職員に対して，講義と実習の両面にわたる個別指導を行い，漢籍整理の専門的知識と技能の向上をめざすもので，1991年度までに32機関48名の受講者があった。研修受講者は，受講後その所属図書館の漢籍整理作業を開始

し，常時本文献センターと連絡を保ちつつ作業を継続しており，著しい成果をあげている。

5．漢籍貴重書複本化

本研究所の漢籍は約30万冊あり，その中には宋刊本・明刊本・朝鮮刊本等の貴重書が含まれている。このため，学内外のみならず，海外からも多数の利用者があり，図書の損耗も少なくない。貴重書は，文化財としても緊急に保全措置を取る必要に迫られていたが，1989年度から予算が配当され複本化を開始した。1991年度は，研究所所蔵漢籍の根幹をなす大木文庫を中心に実施した。

6．情報検索

アジア研究の急速な発展のため，本文献センターの情報サービスに対する国内・国外の需要はますます強くなってきている。漢籍所在調査の一環としての本研究所所蔵現代中国書，及び朝鮮関係図書所在調査についても，冊子体目録の作成を進めると共に，データベース化を検討している。

研究所の班研究「アジア研究資料の収集及びデータベースの作成」と協力して非ローマ字言語資料のデータベース化に取組む事，さらにUT—NETを利用したデータ通信・転送等により，全国文献・情報センター長会議で合意された，4大学5センター間でのフィージビリティ・スタディを行う事も，今後の課題である。

7．今後の展望

本文献センターは，東洋文化研究所の応援を得て目録編纂事業を電算化し，学術情報センターの漢籍データベースに協力すると共に，国内・国外の研究機関と協力して文献所在調査を粘り強く継続し，アジア研究資料のネットワーク作りを推進したい。具体的には，ワークステーションによる目録及び工具書の作成を行い，それらをデータベース化する。他方，研究所の海外研究基地構想の一翼をになうものとして中国，香港，シンガポール等の研究機関の蔵書調査

を行い，本研究所のみならず，わが国における資料収集を長期的展望のもとに行う事に寄与したい。

8．刊行物

1）『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』

『本文篇』を1973年2月に，『索引篇』を1975年3月に刊行した。また，1981年3月に補訂合冊縮印版を再版した。

2）漢籍所在調査報告

漢籍の全国総合分類目録を作成する事を目的に，1974年度から調査を実施し，1980～85年にかけて，長崎大，熊本大，愛媛大学の各附属図書館や新潟県立新潟図書館，新発田市立図書館の漢籍分類目録（4冊）を作成した。現在は，漢籍整理長期研修の受講者がその所属図書館で漢籍整理作業を行う際，要請があれば支援しており，1990～91年度は広島大学附属図書館の目録原稿作成を行った（2をご参照頂きたい）。

3）『東洋学文献センター叢刊』

広くアジア研究の為の書誌・目録・解題・索引・資料等を編集し刊行している。1991年度末までに叢刊63輯，叢刊別輯17輯，合計80輯を数える事となった。工具書の需要は近年ますます増大しており，引き続き『販書偶記刊行者名索引』『東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所漢籍目録合併四角号碼索引（増補）』等を刊行する予定である。

東洋学文献センター叢刊既刊一覧　（＊在庫なし）

*第1輯　東洋文化研究所東洋学文献センター　新収図書目録（昭和41年度）　1968

*第2輯　清代地方劇資料集（一）　1968

*第3輯　清代地方劇資料集（二）　1968

*第4輯　周揚著訳論文・周揚批判文献目録　1969

*第5輯　郁達夫資料　1969

*第６輯　東洋文化研究所東洋学文献センター　新収図書目録（昭和42・43年度）　1970
*第７輯　朝鮮研究文献目録　単行書篇（上）　1970
*第８輯　朝鮮研究文献目録　単行書篇（中）　1970
*第９輯　朝鮮研究文献目録　単行書篇（下）　1970
*第10輯　李大釗文献目録　1970
*第11輯　明刊元雑劇西廂記目録　1970
*第12輯　朝鮮研究文献目録　単行書篇・編著者名索引　1970
*第13輯　魯迅全集注釈索引　1971
*第14輯　1930年代中国文芸雑誌（一）　1971
*第15輯　朝鮮研究文献目録　論文・記事篇（Ⅰ）　1972
*第16輯　朝鮮研究文献目録　論文・記事篇（Ⅱ）　1972
*第17輯　朝鮮研究文献目録　論文・記事篇（Ⅲ）　1972
*第18輯　郁達夫資料補篇（上）　1973
*第19輯　切韻残巻諸本補正　1973
*第20輯　目録学　1973
*第21輯　花間集索引　1974
第22輯　郁達夫資料補篇（下）　1974
*第23輯　仁井田陞博士輯　北京工商ギルド資料集（一）　1975
第24輯　江西蘇区文学運動資料集　1976
*第25輯　仁井田陞博士輯　北京工商ギルド資料集（二）　1976
第26輯　民国以来人名字号別名索引　1977
第27輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（一）　1978
第28輯　仁井田陞博士輯　北京工商ギルド資料集（三）　1978
第29輯　中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録　1978
第30輯　仁井田陞博士輯　北京工商ギルド資料集（四）　1979
第31輯　儀礼疏攷正（上）　1979

第32輯　儀礼疏攷正（下）　1979

第33輯　仁井田陞博士輯　北京工商ギルド資料集（五）　1980

第34輯　小説月報（1920—1931）総目録　1980

第35輯　コミンテルン定期刊行物中国関係論説・記事索引　1981

第36輯　魯迅文言語彙索引　1981

第37輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（二）　1981

第38輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（三）　1982

第39輯　仁井田陞博士輯　北京工商ギルド資料集（六）　1983

*第40輯　東洋文化研究所所蔵　中国土地文書目録・解説（上）　1983

第41輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（四）　1983

第42輯　校合本　大越史記全書（上）　1984

第43輯　『植民地雑誌』（*Koloniaal Tijdschrift*）所収論文目録　1984

第44輯　校合本　大越史記全書（中）　1985

第45輯　江西蘇区紅色戯劇資料集　1985

第46輯　宋之問詩索引　1985

第47輯　校合本　大越史記全書（下）　1986

*第48輯　東洋文化研究所所蔵　中国土地文書目録・解説（下）　1986

*第49輯　許舒博士所輯　廣東宗族契拠彙録（上）　1987

第50輯　沈佺期詩索引　1987

第51輯　中華人民共和国・朝鮮民主主義人民共和国　職官歴任表　1987

第52輯　韓国政治エリート研究資料——職位と略歴　1987

第53輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（五）　1988

*第54輯　許舒博士所輯　廣東宗族契拠彙録（下）　1988

第55輯　南岳思大禅師立誓願文索引——六朝隋唐宗教・思想資料　1988

第56輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（六）　1988

第57輯　郁達夫資料総目録附年譜（上）　1989

第58輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（七）　1989

第59輯　郁達夫資料総目録附年譜（下）　1990

第60輯　山西票号資料・書簡篇（1）　1990

第61輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（八）　1990

第62輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目（九）　1991

第63輯　自一九二七年至一九三七年　日本現存短期零本中国雑誌記事総目　収載雑誌名索引　1992

*別輯1　東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録書名人名索引・京都大学人文科学研究所漢籍分類目録書名人名通検合併　四角號碼検字表　1975

*別輯2　海外所在中国絵画目録（アメリカ・カナダ編）　1977

*別輯3　海外所在中国絵画目録（東南アジア・ヨーロッパ編）　1981

*別輯4　日本所在中国絵画目録（寺院編）　1982

別輯5　LABRANG　李安宅の調査報告　1982

*別輯6　日本所在中国絵画目録（博物館編）　1982

*別輯7　日本所在中国絵画目録（個人蒐集編）　1983

別輯8　中国経済関係雑誌記事総目録（一）――『中外経済周刊』『経済半月刊』『工商半月刊』　1983

別輯9　孟郊詩索引（上）　1984

別輯10　孟郊詩索引（下）　1984

別輯11　中国経済関係雑誌記事総目録（二）――『国際貿易導報』　1985

別輯12　中国経済関係雑誌記事総目録（三）——『中行月刊』 1985

別輯13　『内務行政雑誌』（A Catalogue of the Articles in *Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur*）所収論文・記事目録　1985

別輯14　中国経済関係雑誌記事総目録（四）——『銀行週報』（上）　1987

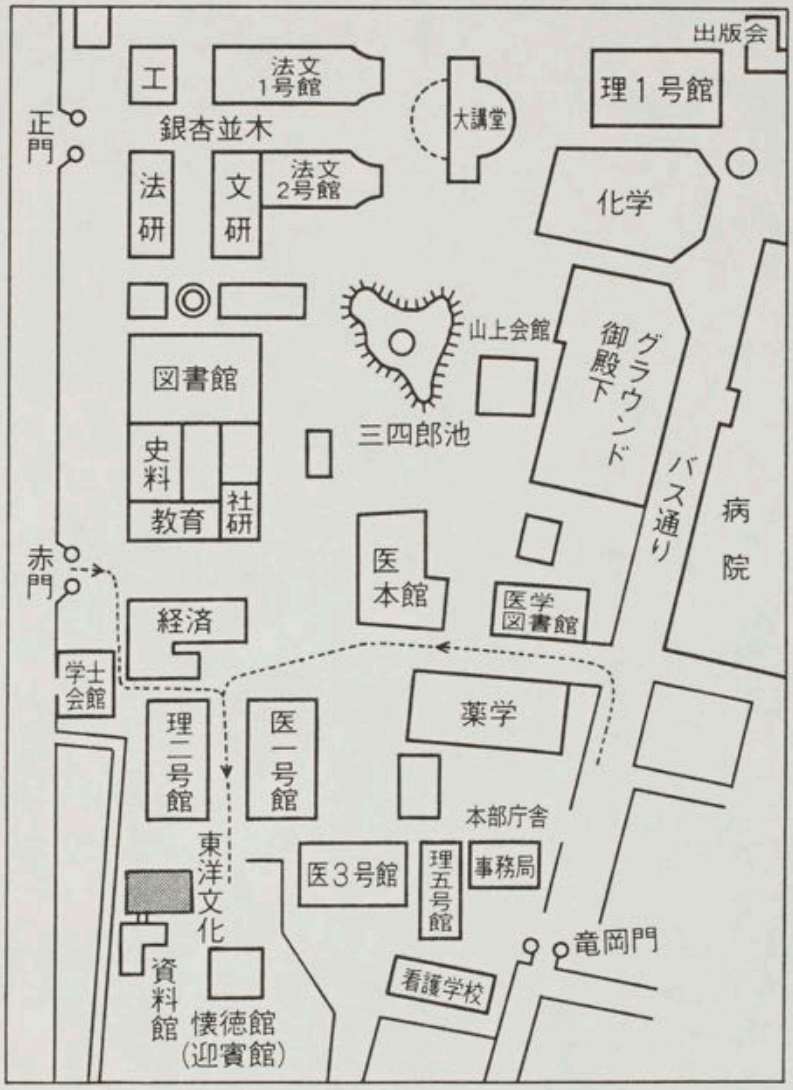
別輯15　春秋晋国『侯馬盟書』字体通覧——山西省出土文字資料　1988

別輯16　中国経済関係雑誌記事総目録（五）——『銀行週報』（下）　1989

別輯17　海外所在中国絵画目録　改訂増補版（ヨーロッパ編）　1992

4）『センター通信』

本文献センターの活動報告，各方面からの意見・要望などを中心に編集し，1991年度末までに32号を刊行した。



平成4年9月10日発行

東京大学東洋文化研究所

〒113　東京都文京区本郷7—3—1

電話（03）3812—2111　内線　5833

ファクシミリ（03）5684—5964

（印刷　三秀舎）